



HTA

特集

未来を生きる子どもたちへ

三原市名誉市民 大田 堯さんからのメッセージ

TAKASHI O

大田 堯

お お た た か し

大正7年、三原市本郷町船木生まれ、97歳。教育研究者(教育史・教育哲学)。現在は東京大学名誉教授、都留文科大学名誉教授、日本子どもを守る会名誉会長、北京大学客座教授。東京帝国大学文学部卒業。東京大学文学部教授、同学部長、日本子どもを守る会会長、教育科学学会委員長、日本教育学会会長、都留文科大学学長、世界教育学会(WAAER)理事などを歴任。平成17年3月に三原市名誉市民となられる。

現代の社会は、子どもが育つのに恵まれた環境とは言えません。テレビ、ゲーム、インターネット、スマートフォン。子どもの周りにはさまざまな刺激的な情報が散乱し、インターネットを介しての顔の見えないコミュニケーションが、時間や場所に関係なく、無数に飛び交っています。身近にあった野原や小川は住宅や道路に姿を変え、子どもが自然と気軽に触れ合える場所はすっかり少なくなりました。

「ゲームばかりしないで」「たまには外で遊んだら」「いつまでスマホいじってるの」。そう言って親は子どもを叱りますが、いまの社会や環境は営利や利便性を追求してきた大人がつくり出したものです。子どもに責任はありません。

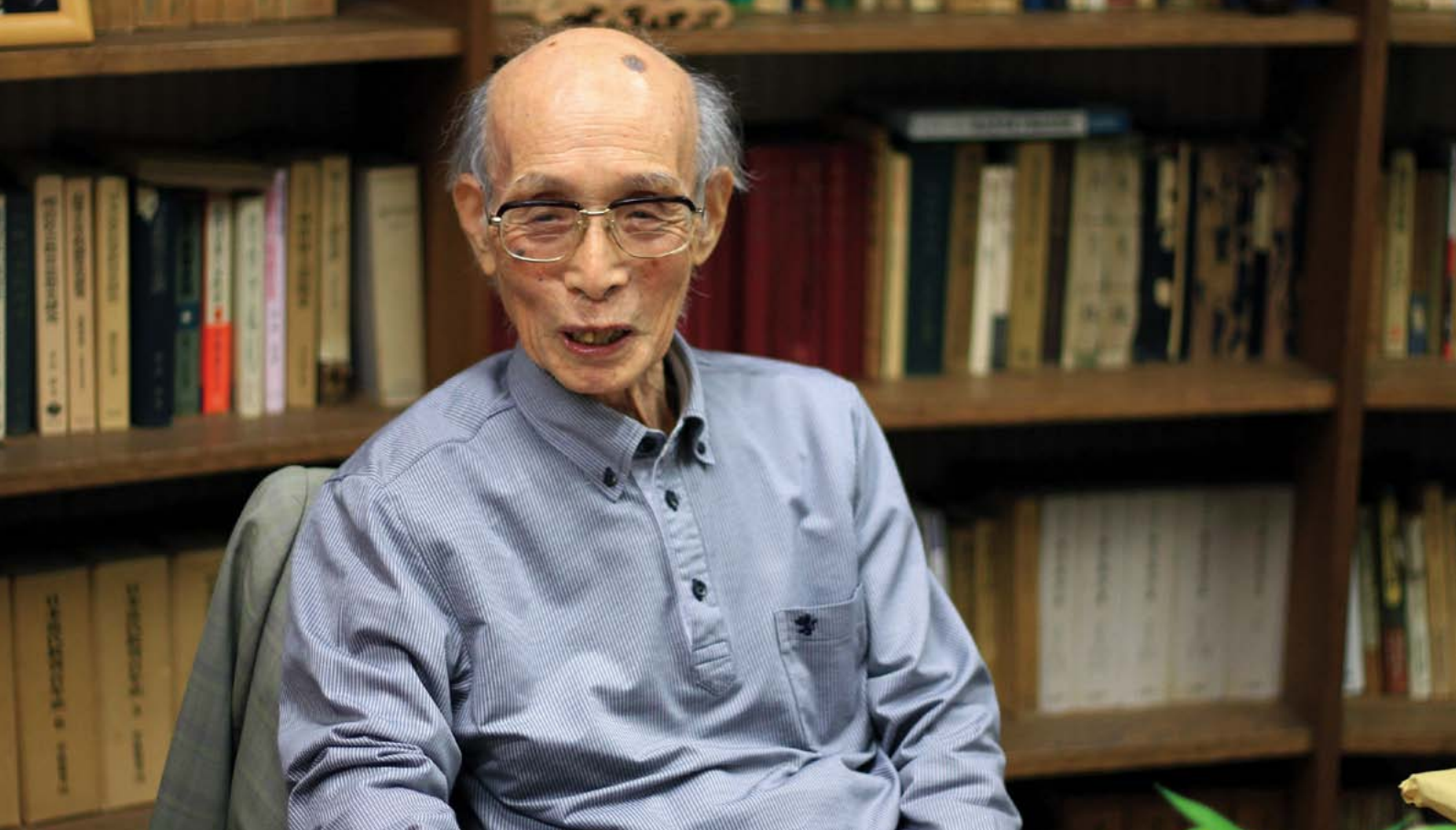
昔に比べて、私たちの生活は豊かで便利になりました。その反面、人と人、人と自然とのつながりは希薄になり、絆が失われてしまっているようにも見えます。

三原市名誉市民大田 堯さん。本郷町船木に生まれ、97歳となった現在も、子どもにとってより良い社会はどうあるべきかを問い続ける現役の教育研究者です。

大田さんは、「無縁社会」となってしまった現代にこそ、子どもとしっかり向き合い、かわり合う「生命の響き合い」の子育てが大切だと話します。

三原で過ごした少年時代が自分の原点と言う、大田さんのメッセージを市民の皆さんに届けます。

◎総務広報課 0848・67・6007



船木村の自然の中で育んだ感性

私は豊田郡船木村（現在の本郷町船木）で生まれました。家の近くに沼田川があり、子どもの頃はもっぱら川に入って遊びました。足に触れる水の流れ、川底の清潔な砂利やぬるぬるした丸い石の感触は、今でも鮮明に思い出すことができます。

小学生の私は、川で魚を捕まえたり、稲刈りの終わった田んぼでトンボの群れを追ったりして、日が暮れるまで夢中になって遊びました。自然にじかに触れ、仲間と一緒に、身の回りの植物や生き物について学んだり、

驚きを共有したりしました。

そんな身近なつき合いをしていた沼田川ですが、川で遊んでいた姉の命を奪い、時には氾濫して家や学校の周りを湖のようにすることもありました。

川は優しく楽しいだけでなく、人間の力が及ばない存在なのだと、怖さや不気味さを感じました。

少年時代、私は日々自然と触れ合う中で、人として最も大切な感性を育むことができたと思っています。私の原点は、古里の船木村にあるのです。

本郷町で実践した地域教育計画

東京大学を卒業後、徴兵されて東南アジアへ出兵しました。船木村に復員し、そこで本郷町の先生から、新設された社会科について「どんなものか見当がつかない」と相談を受けました。

教育を研究するものとして協力するのは当然です。社会科というものは地域の住民が自分たちで地域を研究し、課題を解決していくことから出発するもの

だと考え、本郷町の皆さんと町の実態調査に乗り出しました。

夜には学校で教育懇話会を開き、聞き取った内容や集計した数値を見ながら、住民に問題を話し合ってもらい、それを参考に社会科の指導案を作成しました。社会科だけでなく、どの教科も生活の実態と結び付ける努力をしました。

住民も参加して地域の課題解



大きな樹木に囲まれた大田さんの自宅（さいたま市緑区）



決に取り組みましたので、地域づくりになりました。学校は子どもたちの教育の場というより、地域の文化センターのような役割でした。子どもは学校だけでなく、家庭や地域、仲間など、全体とのかかわりの中で育っていくことにも気付かされました。

本郷町の皆さんの支えがなければ、あのようにはできなかったと思います。

特集 未来を生きる子どもたちへ

三原市名誉市民 大田 堯さんからのメッセージ

ひとつひとつ違う生命の響き合い

子どもは遺伝子DNAというユニークな設計図を持った一つの生命としてこの世に生まれてきます。

り返しながら、状況に応じて変化します。つまり、人は自ら変わる可能性を秘めているのです。

そして、一人として同じ設計図を持っている人はいません。

人とかかわるといことは、自分と違う設計図を持った他者と、お互いの存在を認めながら歩み寄ること、まさに生命と生命の響き合いなのです。それは、人と自然のかかわりも同じです。

大人は、子どもの興味や関心に寄り添って、その子の持ち味、個性を引き出すように情報を提供する必要があります。

人とかかわり合いを大切にしている大田さんが自宅に設けたサークル室



その設計図は建築のためのものとは性質がまったく違って、内外からの刺激に応じて弾力的に伸び縮みし、新しい出会いがあることに同化と異化を繰り返す。

家庭でも、子どもを親の思いどおりにしようと考えるのではなく、子どもの持ち味が伸びるように、好きな事や得意な事を励ましなが、持ち味をつくり出してほしいと思います。そうすれば、もっとおらかな気持ちで子どもを見ることができるようになります。

子どもたちに、かかわり、わかち合う環境を

船木村の自然の中で夢中になって遊んだ少年時代。本郷町の皆さんと協力して取り組んだ地域教育。これらの経験が、のちに子どもたちのための図書館と広場というひらめきを私に与えてくれました。

当初は、本を読んだり、仲間と調べ物をしたりして楽しめること、ものの館が、自然の中にある姿をイメージしていました。

結局、適した土地が見つからず、本郷駅前にあった妻の実家の跡地に子ども図書館を建てていただきました。

どうしても図書館とつなげて、子どもたちがさまざまな生命と触れ合う自然を用意したかったので、近隣の土地を買い足して寄付しました。それが有志の皆さんのご尽力で、子ども広場になりました。

図書館には、たくさんの方が、読みかたりもしています。広場には、数え切れない生き物が共生していて、自然の中で遊ぶことができます。その中で、子どもたちには本物に触れたときの驚き心、仲間とわかち

合ってもらいたいと思います。これほど人間という生き物にとって重要な経験はないのです。

子どもは人や自然のかかわり合いの中で、自らを創り出すとします。この自らを自らで変えていく力によって、環境に適応していくことができると私は考えています。

未来を生きる子どもたちは、私たち大人が想像もできないような未知の問題に直面します。その時、単に教えられた知識ではなく、自らを変えていく中で身に付けた力でこそ、その問題を乗り越えていくことができるのです。



子どもたちと本の感想などを話し合う大田さん(ほんこつ子ども図書館で)

子ども図書館

ほんごう子ども図書館



JR本郷駅前にある山小屋のような小さな建物。杉の香りがほのかに漂う室内には、天窓から柔らかな光が差し込み、絵本を収めた木製の本棚が並んでいます。
集まった子どもたちが温もりのある木の床に腰を下ろすと、ろうそくに火が灯され、絵本の読みかたりがゆつくりと始まります。

「古里に子どものための図書館をつくりたい」。

ほんごう子ども図書館は、大田さんの夢に地域の皆さんが賛同し、平成13年7月に開館した子どものための図書館です。正式名称は「ほんごう子ども館」。建設費や備品の購入費などは行政が負担し、運営は地域のボランティアで行なう、全国でも珍しい公設民営方式の図書館です。土地は大田さんが寄付しました。



図書館では、「本は子どもの身近なところにあるほどこい」という大田さんの考えのもと、運営委員やスタッフの皆さんがアイデアを出し合い、試行錯誤を重ねながら、子どもたちが本に親しめる仕組みを一つずつ作り上げてきました。

ここでは「静かにして」「おしゃべりはしない」の約束はなし。



他の人の迷惑にならないければ、床に寝転んで本を読んだり、友だちと話し合いながら調べ物をしたりしても大丈夫です。

本の貸し出しも、多くの図書館が読み取り機を利用する中、「温かみを大切にしたい」と手書きのカードにこだわっています。家路に着く子どもたちには、「来てくれてありがとう。また来て

ね」と声を掛けて見送ります。



活動の基本になっているのが、開館時から続けている絵本の読みかたです。月3回の「お話し会」のほか、近隣の幼稚園や保育所の子どもたちを定期的に招いて行なっています。

読みかたにまつわるエピソードを、大田さんはこう振り

特集 未来を生きる子どもたちへ

三原市名誉市民 大田 堯さんからのメッセージ

返っています。

「図書館ができたばかりの頃、私がすっかり『読み聞かせ』と言ってしまう、スタッフに『ここでは読みかたりです』と訂正されたことがあります。私は何事も調べずにはられない性格ですから、自宅に戻ってよく調べてみると、民俗学者の柳田國男さんが『語る』という言葉は、もと『関わる』の意味から来ていると書いておられました」。

「つまり『かたる』ことは、『かわり合う』ことなのです。子ども図書館の皆さんが『読みかたり』にこだわっているのは、大人から子どもへの一方的な『読み聞かせ』ではなく、本を通じて子どもとかわり合い、お互いの絆を強めたいという思いがあるからでしょう。なるほど、この人たちは自分より余程わかってい



るな、と感心しました」。

図書館では、紙芝居やコンサート、星空映画会など、さまざまな行事を開催してきました。また、「地域での子育てを総合的に支援する場所でありたい」との



思いから、読みかたり教室や絵本作り講座、親子での防災体験会なども実施しています。

来年で開館15周年を迎えるほんごう子ども図書館。運営は決して楽ではありません。しかし、

スタッフの皆さんは「子どもたちの笑顔と元気な声が私たちの力の源です」と、より良い運営のための努力を惜しみません。

「絵本を仲立ちに、膝の上で子どもと語り、かわり合いなが

ら、生命を響かせ合う場所であってほしい。」

そんな大田さんの思いが、スタッフの皆さんの温かい真心と一緒に、利用者の皆さんに届けられています。



(左上)「子どもたちの笑顔と元気な声がエネルギー」と話す運営委員の皆さん

(左下)絵本で自分の居場所づくり。図書館は子どもが思い思いに過ごせる場所

(右下)開館当時、小学6年生だった女の子は母親になりました。いまではわが子連れて通っています

子どもも広場

子ども広場なんじやもんじや

本郷小学校の東隣りにある雑木林の中の広場。
春には木々の若葉が一齐に芽吹き、夏はセミの鳴き声が響きます。秋には落ち葉のじゅうたんが広がり、冬はひっそりと生き物の休息を感じさせます。
ここは、子ども広場なんじやもんじや。大田さんと地域の皆さんが協力し、子どもたちのためにつくった森の中の遊び場です。

「子ども図書館と子ども広場は車の両輪。子どもは本を通じて絵や文字文化に接し、仲間と一緒に自然に触れることで、知識と感性をつなげていくのです」。

大田さんが、図書館とともに古里にどうしてもつくりたかったのが、自然の中で遊ぶことが

できる子どものための広場でした。愛称の「見慣れない珍しい木」を意味する「なんじやもんじや」は、広場の真ん中にある大きな木から名付けられました。
広場は子どもたちにとって、生命の営みを続ける生き物たちと触れ合う場所です。ここには多

種多様な動植物をはじめ、鳥や昆虫など、たくさん生き物がいます。子どもたちは遊びながらこれらに触れ、身近な自然や生き物について学んでいくのです。

大田さんは、図書館と広場の役割をこう話します。



「図書館は、子どもたちの自然への探検基地。雲のたたずまい、動植物や足元にころがる石ころなどとの出会いで、ぶつかった驚き、疑問に自分たちで見当をつけるために、図書館やその他の資料が役立つでしょう。そこを基地に、あらかじめ、何かの目当てを定めて、探検に出発するのも、子どもたちにとっては楽しいことでしょう」。

おうと、竹炭作りや忍者遊び、焼き芋大会も行なっています。広場も開設から13年。できるだけ自然に近い状態にしているため、草刈りや竹の伐採など、維持と管理には多くの時間や手間がかかります。大田さんも「無償で地域づくりをしてくださっている皆さんには、深い感謝と敬意を抱いています」と話します。

❖
運営するのはほんごう子ども図書館の皆さんです。子どもたちが安全に自然に親しめるよう、広場を整備するだけでなく、できるだけ自然の中で過ごしてもら

「大田さんの夢は、私たち共通の願いでもあります。1人でも多くの人に参加していただき、活動の輪が広がれば」とスタッフの皆さん。図書館と広場は、そんな温かい思いを持った人たちが支える大切な場所です。

水の中に生息する生き物を探したり、珍しい形の木の実を探したり。ここは探検広場。子どもは遊びを見つける名人です。自然の中で、友だちと一緒に夢中になって遊びます

ちへ
セージ





特集

未来を生きる子どもたち

三原市名誉市民 大田 堯さんからのメッセージ



わくわく
よく遊び、
楽しんで、
本に親しむ

きみたちの
青い空は
広く深く
未来との
想いが
はじけて

大田 堯



自主上映会を開いてみませんか

映画『かすかな光へ』

製作・著作:ひとなるグループ
監督:森 康行さん

平成23年、大田 堯さんのドキュメンタリー映画「かすかな光へ」が完成しました。現在までに全国600カ所で自主上映会が開かれています。

皆さんも学習会や研修会などで上映してみませんか。DVD貸出料は、鑑賞者1人につき500円(例えば、10人で鑑賞した場合は500円×10人=5,000円)です。

興味のある人は、ぜひ問い合わせてください。

問ひとなるグループ(☎090・2425・9320)

E-mail: gyominuma@jcom.home.ne.jp



大田 堯さんの著書は
図書館で借りられます

市立図書館では、大田 堯さんの最新著書「大田 堯自撰集成」全4巻(藤原書店)をはじめ、大田さんの著書約30冊を所蔵しています。

本は貸し出しできますので、ぜひ読んでください。

問中央図書館(☎0848・62・3225)

